

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### キアゲハを育てる～地域との連携～／姫路市立御国野幼稚園

子どもたちは、園生活の中で、生き物とどのような出会い方をしていますか？また、出会った生き物を育てることになった時、飼育の過程で保育者は、どのようなことを大切に「科学する心」を育てていますか？

園が、保護者や地域との連携を積み重ねてきたことから、園の保育の魅力が保護者から地域に伝わる姿に繋がっている園の実践をご紹介します。5歳児が、チョウに関わる姿を見て、4歳児も興味をもっていく様子が伝わってきます。



### ● キアゲハの幼虫だって…／4・5歳児

保護者から地域の方へ「幼稚園では、生き物を育てて子どもたちに命の大切さや不思議さを感じる心を育てているよ」と伝えてくれた。そこで、地域の方が、「子どもたちと育てて欲しい」といろいろな生き物のプレゼントを届けてくださった。

### ✦ 5月20日 キアゲハがきた！

- 園を訪問した地域の方が、キアゲハの幼虫を見せると、興味を示す子どもたち…。「きれいな幼虫や」「大きいな」「触っても、いいの？」「見せて、見せて」「初めて見たよ」と言いながら集まってくる。  
子ども：「凄いなあ」  
地域の方：「セリを食べるんだよ」
- 子どもたちは「これ何？」「どこにおったん？」などと質問する。そして、地域の方の説明を真剣に聞いている。「サナギ知ってるよ」「いつ、チョウになるの？」などと地域の方と親しくやりとりをしている。
- その5歳児の様子を4歳児もじっと見ている。



### ● 保育者の援助と環境構成

- 地域の方から、保育の場面で子どもたちが直接話が聞けるような場を作る。飼育ケースやセリをまとめる物など地域の方の指示で準備する。興味をもった時に見ることができるよう、チョウの絵本や図鑑を置いておく。

## ✦ 5月21日 サナギになった

- 登園すると子どもたちは、「セリは大丈夫か?」「葉っぱが萎れている」「いっぱい食べてる」「サナギになってるよ」「すごいなあ」「ここにも、おったよ!」などと、飼育ケースを覗いて気付いたことを友達と伝え合っている。
- 5歳児は、チョウの世話で自分たちでできることは、喜んで行う。
- 5歳児が、外に遊びに出ると、4歳児が集まって飼育ケースを見ている。
- たくさんの幼虫が、サナギになった。  
Aちゃん:「いつかな?チョウになるの…」  
Bちゃん:「早く見たいね」
- 図鑑を見て調べ、「6月になったら、チョウになるらしい」と友達に教える子どもがいる。



### ● 保育者の援助と環境構成

- 子どもたちが、自分たちで世話ができるように、また分からないことは、聞けるように、地域の方に飼い方を教えてもらう機会を作る。
- 子どもたちのサナギへの思いや気付きを受け止めながら、子どもと一緒に世話をする。
- 「どんなチョウになるのかな」と子どもたちの期待感を受け止め、生まれてきた時のイメージが広がるように言葉をかける。

## ✦ 6月2日 生まれている

- 5歳児の子どもたちは、「生まれてる」「チョウになってる」「きれいね」「じっとしてる」「羽、動かしてる」などと、感じたことを言いながら、じっと見ている。
- 見に来た4歳児が、飼育ケースに指を付けながら「触るとついて来るよ」「ほら、見て見て」と友達がしていることを、次々真似ている。
- 5歳児は、餌がないことを心配して…。  
Cちゃん:「ほってたら死んでしまうから、蜜やろう」  
Dちゃん:「赤い花が好やから、採ってくる」と言って花を探して来るが、食べない。
- 「みんなが見てるからや…」という子どももいる。「そっとしておくことにする」と話し合い、見たり触れたりしないことになる。



### ● 保育者の援助と環境構成

- 「生まれたね」「きれいね」などと子どもと一緒に感動をする。
- 4歳児の気付きを「ほんとについてくるね」「すごいこと発見したね」と認める。
- 餌を心配する子どもたちの思いを受け止め、「どうしたらいいかな?」と一緒に考える。

- Eちゃん：「食べないな」  
Fちゃん：「逃がさないと死ぬで…」などと、話していた。

しばらくして、みんなで逃がすことになる。

- 子ども：「赤い花が好きやから」という意見を受け入れ、花壇に逃がす。  
Gちゃん：「ほらな、蜜、飲んでるよ」  
Hちゃん：「ほんまや」  
Gちゃん：「おなか、すいとったんやな」と言いながら見ている。

子どもたちは、チョウが飛び立つと「バイバイ、また来てね」とみんなで送る。



#### ● 保育者の援助と環境構成

- 子どもの話を聞き、一人一人の思いを受け止める。

#### ✦ 考察

- 地域の方が、珍しいチョウの幼虫を持ってきてくださり、子どもたちは、貴重な経験ができた。キアゲハは、柑橘系の葉を食べるのでなく、セリの葉を食べるので、餌の確保が難しかったが、子どもたちは、丁寧に世話をしたり、餌の心配をしたり、キアゲハについてよく調べたりなど、愛情をもって育てることができた。
- 保育者は、常に子どもたちの思いに寄り添い、何に興味をもち心が揺さぶられているかを見守ったり、共感したりすることの大切さを再確認した。
- 餌を食べなくなった時、子どもたちは図鑑を見て調べ、チョウのために何とかしてあげたいという気持ちが見られた。取ってきた花の蜜を食べない姿を見た時は、何も言わない「チョウの気持ち」になって考えようとしていた。
- みんなで大切に育てた経験は、小さな生き物にも命があることを知り、大切にしようとする心の育ちに繋がったように思う。
- 保護者や地域の方との連携など、人との関わりを大切にしてきたことが、子どもたちの体験を豊かにしていると思われる。また、この事例のきっかけのように、保護者から地域の方に、園の保育で大切にしていることが伝わる姿にも繋がったのではないと思う。